

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

開発と家族戦略の多様化：南ラオスの一農村の事例から

著者	中田 友子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	62
号	1
ページ	75-103
発行年	2011-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000429/

開発と家族戦略の多様化 —南ラオスの一農村の事例から

中 田 友 子

本研究は、南ラオスのある村において、この地域で2005年以来推進されているゴム園開発のもとで見られる住民たちの生計に関する戦略の分析を通して、現在進行しつつある彼らの文化変化の一端を明らかにすることを目的とする。

調査地であるチャンパサック県パチアン郡で展開されている大規模なゴム園開発¹は、地域住民たちの生活を大きく変化させている。2万ヘクタールに及ぶ広大な土地にパラゴムノキを植林することは、即、住民たちがそれまで使用してきた焼畑や常畑を失うことを意味していた。したがって、多くの住民たちは生計を大幅に見直すことを余議なくされたのである。ゴム園を経営する会社は、地域住民たちをゴム園の労働者として雇うことにより、彼らの生計を成り立たせることができるだけでなく、生活環境も向上させることが可能になると当初から今日まで主張している。しかしながら、この主張が少なくとも現在までのところほとんど説得力がないことが地域住民の語りから明らかとなっている。というのは、一つには、会社は基本的に18歳から35歳までの男女しか雇わず、たとえば40代以上の住民を雇わないからである²。

もう一つの要因は、その労働の不安定性である。現在、最初の植林から6年目に入っているが、タッピング（ゴム樹液採取）はごく一部で開始してい

1 当該地域のゴム園開発の概要については拙稿〔2009〕および〔2010〕を参照されたい。

2 最近では村側との交渉により、会社は一部40代の住民も雇うことを了承したとのことだったが、その後聞き取りを続けると、現実には雇用が進んでいないことがわかった。

るだけである。そのため、多くの労働者に割り当てられる仕事は除草と施肥、それに農薬散布などに限られる。雨季は特に除草の作業を中心に仕事には事欠かず、毎日のように就労するが、乾季になるとほとんど仕事がなくなってしまう。会社から支払われる月給は、固定給ではなく、仕事量に応じた金額であるため、1か月のうちせいぜい10日前後、ときには数日間しか働かないとなると、受取額は激減する。村人たちによれば、ろくに主食であるコメも買えないというのである。したがって、かつての焼畑や常畑での自給的な色彩の強い農業の代替的な生業としては、ゴム園での労働はかなり不安定であり心もとないものである。

ゴム園労働に完全には頼れないとなると、ではどうすればよいのだろうか。そこに住民たちの様々な、まさに生存をかけた戦略が観察されるのである。ここではまず彼らの様々な戦略を見渡し、そのうえで親族とのつながりや相互扶助の維持・強化と個人主義的対応というまったく相反する戦略について、ディスポジション（傾向）の変化という視点から分析・考察を行う。

1. 多様化する経済活動

かつては、ほとんどの世帯が焼畑での陸稲作りを行い、自家消費用のコメを全部ないしは大部分賄っていた。したがって、村内部で生業の多様性などはほとんど見られなかったといってよいだろう。一部の世帯には軍隊に勤務し給料を受け取っているメンバーがいたが、その額が家族の生活を賄うには少なすぎるため、焼畑で米作りを並行して行っているケースがほとんどだった。住民たちの生業や生活スタイルにはかなりの程度の均質性が見られたのである。ところが、住民たちが焼畑や常畑を行っていた土地のほとんどは、ゴム会社によって取り上げられてしまい、彼らはいきなり何らかの方策を考える必要に迫られるようになった。それでも最初の2年間ほどは、ゴム・プランテーション内に植えた苗木の列の間に稲を育てることで、少量であって

もコメを生産することはできた。しかしその後、木は大きく育ってしまい、稲を植えることはいいよできなくなったため、村人たちは食べるコメを購入するための収入を得る方策を本格的に考えなければならなくなった。

土地へのアクセス形態

筆者が当該地域でこの研究のための調査を本格的に開始したのは、2010年2月であるが、その時点で村人たちはさまざまなやり方で自家消費用のコメを確保する、あるいはこれを購入するための現金を獲得しようとしていた。多くの世帯が所有する農地のない状態で、ゴム園内部の使われていない土地、というよりは隅のほうに空いたわずかな土地に稲を植えていた。当然その面積はごくわずかであり、一軒の世帯が複数箇所を使用し、何とか家族が数か月間食べるコメを生産していた。それ以外では、近隣の土地を外部の人から借りている世帯も複数ある。借りるといっても、借地代は払わず、彼らが土地を開墾するという条件で土地所有者から1シーズンに限り、利用する許可を得る。これにより、土地所有者側は新たに購入した土地を自ら開墾する、あるいは金を払って開墾させる必要がなくなる。ちなみに住民が挙げた土地所有者は農民ではなく、病院に勤務しながら薬局も経営する医者夫婦であり、彼らは購入した土地に今後、パラゴムノキなどを植える予定だという。

とはいえ、すべての世帯が占有していた土地をすべて失ったわけではなく、また現在も所有していないわけではない。村人のなかには水田または焼畑を2005年以降購入し、稲作を行っているケースがあり、ある世帯は2006年に水田を700万キープ³で購入し、またこの世帯から独立した弟の世帯は2008年に焼畑1ヘクタールを150万キープで購入している。ただし、この世帯はもともと牛をかなりの頭数飼育しており、そのため資金に恵まれていたという事情がある。この村の大多数の世帯にとっては選択不可能な、ほとんど例

3 ラオス・キープの為替レートは、2011年9月現在、100キープが約0.95円である。

外的ケースといってもよい。

また、ゴム植林プロジェクトの指定区域の外に村人たちがもっていた土地は奪われることはなかったため、一部の村人は現在もそこで細々と陸稲栽培を行っている。ただし、この指定区域の外というのは、ほとんどが村から10 km以上離れた場所にあり、小川に近い場所はかなりの急斜面になっている。そのため、米作りには決して適した場所とはいえないし、また各世帯が保有する土地の面積もそれほど多いわけではない。最初にゴム会社がこの土地をゴム植林区域に入れなかったのは、急斜面でゴムノキの植林に適していないことと、近くに橋がかかっておらず、車の通行が困難なためではないかと考えられる⁴。村の世帯で借地ではなく、またゴム園内の土地でもない場所で陸稲栽培を継続している世帯のほとんどが、この小川付近の土地を利用している。

もうひとつ、コメ生産のための土地にアクセスする方法がある。それは、外部に住む親族の土地を利用することである。村内部ではすべての世帯が土地のほとんどを失っているため、この問題に関して互いに頼ることはできない。しかし、このプロジェクトが及んでいない地域に住み、土地を保有している親族に頼ることは可能である。ある世帯は、妻の父が県内の別の郡に住み1ヘクタールの水田で稲作を行っている。ゴム植林が始まって数年になり、いよいよコメ栽培ができなくなったと見るや、それまで誘われても決して乗ることのなかった、妻の兄弟との共同での水田耕作を受け入れることにした。ただし、その地域は村から数十キロ離れており、とても通うことはできない。夫婦は農繁期には村を離れあちらに住みこんで農作業を行う決心をした。1ヘクタールの水田から約4,800キロの収穫が見込めるといい、老いて働けなくなった妻の父や、兄弟たちと分配しても、おそらく自分たち家族

4 ただし、近年、ゴム会社はこの土地にも食指を伸ばしつつあり、一部は買い取りを行っている。それは主にコーヒーを植えるためであり、高度が高いため、この郡の中では比較的涼しい場所になっていることでコーヒー栽培が可能とみなしたのであろう。実際に村のある世帯は、この地区に保有していた5ヘクタールの焼畑用の土地を3,000万キープでゴム会社に売却した。

が1年間に消費するコメを確保できると考えたのであろう。

村の多くの世帯には、これまで利用してきた土地を失っても、なんとか自家消費用のコメをたとえわずかでも自ら生産しようとする傾向が強くみられる。そのためにゴム園内部のコメ栽培には適していないわずかな土地を利用するケースもあれば、より積極的に外部のネットワーク（親族や知人）を利用するものまでさまざまなやり方が観察される。

現金収入獲得方法

すでに述べたように、ほとんどの世帯が細々とコメ生産を継続しているが、世帯の1年間の消費量には遠く及ばないのが現実である。したがって、足りない分を購入する必要がある、そのための現金収入を獲得しなければならない。かつては、食べるコメは自分で生産し、それ以外の日常的な必需品を買うための現金は、必要があるときにバナナの葉や果物などを売ることによって得るというのが普通であった。したがって、現金収入の必要性は限られていたといつてよい。しかし、現在は、主食のコメを購入する必要がある、必要な現金の額も大幅に増加している。定期的な現金収入を確保する手段の一つがすでに述べたゴム園での労働である。とはいえ、これも既述したように、安定的な収入をもたらすとは言い難い。また、世帯内にゴム会社に雇ってもらえるメンバーがいない場合もありうる。たとえば、40代以上と、10代前半のメンバーしかいない場合、ゴム会社での労働から収入を得ることはできない。一応、18歳以上と規定されているが、10代後半から実質的には雇用の対象となっているようである⁵。ただし、まだ学校に通っている場合は、働きに出ることはできない。かつては高校へ進学する子供はこの村ではごくわずかであったが、近年、はっきりと増加する傾向が見られ、親たちはこれを無理やり辞めさせてまで子供を雇用労働に駆り立てることはしない。

5 実際には、この年齢について厳密に審査されているわけではなく、2～3歳程度なら年上、または年下に申告しても問題はないようである。見た目がおおよそ18～35歳の範囲内であれば、正規労働者（カマコーン・ナイ）として雇用されている。

賃金労働に従事できるメンバーはいるが、ゴム園労働に安定的に頼れないとなると、ほかの賃金労働を探すというのが一つの選択肢となる。特に、乾季にゴム園での仕事がほとんどなくなる時期は、一部の労働者たちは近くにある製材所へ働きに行く。この製材所はゴム植林プロジェクトが始まるずっと前から存在し、村人たちにとって数少ない雇用先となってきた。そこでは男性に限らず女性も木材担ぎの作業に従事する。大きい木材を男性が、比較的小さめのものを女性が担いで運ぶ。とはいえ、これも重労働であるため、ほとんどは10代後半から20代、30代までの若い男女に限られる。収入は日当で3万キープほどだという。

これ以外では、稀に出稼ぎを選択する場合もある。出稼ぎはまだこの村ではごく数少なく、ゴム園での仕事が激減した時期に数ヶ月間、サワナケートの建築現場へ親族の男性とともに働きに行った10代末の男性や、親戚を頼ってヴィエンチャンの縫製工場で働いているやはり10代末の女性、さらにはタイに住む親戚のところへ出稼ぎに行ったが、数ヶ月後に母親が寂しさを理由に村に連れ戻した10代末の女性など、数えるほどである。出稼ぎを選択するのはほとんどが未婚の若者であるが、その数はこの村ではまだわずかであり、しかも主要な現金収入源となっていない。

さて、賃金労働に就くメンバーが世帯にいない場合の現金収入源は何だろうか。ひとつは、筆者が最初にこの村でフィールドワークを行ったときからすでに村人たちが行っていたバナナの葉の市場での販売である。これは現在も多くの世帯が行っており、世帯によっては重要な収入源となっている。以前は、自家消費用のコメはほとんど自給できていたため、バナナの葉はコメ以外の必需品を手に入れる目的で売られていた。村人たちのほとんど決まり文句となっていることばに、「バナナの葉を売ってパーデーク（淡水魚を発酵させた調味料）、ペーンヌア（化学調味料）を買う」というのがある。つまり、バナナの葉はこれら調味料をはじめ、石鹼や洗剤など日常生活に必要なこまごまとした必需品が切れたときや、子どもたちの学校が始まる前にノー

トや筆記用具を購入する必要があるときなどに、市場へ売りに行く傾向があった。現在もそれは基本的に変わってはいない。ただし、主食のコメを完全自給できなくなってしまった現在、ほかに主要な現金収入源のない世帯は、このバナナの葉を売ってキロ単位でコメを買う場合もある。その場合、これを市場へ売りに行く頻度は高くなり、家計におけるその重要性は高まる。

これ以外でこの村の人々が現金収入を得るために売っているのが、木炭である。木炭の生産と販売は以前から見られたが、近年、これに従事する世帯や生産量が大きく増加している。その理由は、言うまでもなく生産できなくなったコメを購入する資金を得るためであり、特にゴム園で雇われない40代以上の人々にとっては重要な収入源となっているだけでなく、何らかの理由でゴム園労働を辞めてしまった人々にとってもこれに代わる仕事となっている。ある世帯が別の世帯を誘って共同で炭焼きをする場合もあり、このようにして炭焼きをする世帯が広がっているともいえる。炭は材料の木を積み上げて土をかぶせ、これを3日間に渡って火を絶やさないように焼き続けて出来上がる。特別な知識は必要ない。材料の木はどこかから拾ってくる場合もあれば、製材所などから余った木を買ってくる場合もある。さらに木を運ぶのに車をチャーターするために金を支払う場合もある。ある世帯は、木を運ぶために一回につき20万キープ支払うと述べる。乾季は月4～5回炭を焼けるため、比較的多くの収入が見込めそうである。ただし、ほかの世帯と共同で炭焼きを行えば、収入も分配することになる。それでも牛などを購入する資金が作れば十分だと語る。⁶ある住民によれば、この地域ではすでに伐採可能な木が極端に減少しており、今後は伐採が行われなくなるだろう、そのため製材所の仕事も減っていけば、やがては材料となる木の調達が困難となる。そうしたときにどうするのが問題だと語る。このように先行きは不

6 この世帯は翌年から妻の父の水田を耕作する予定のため、コメを購入する資金を作るよりも、牛など家畜を購入することを目標としていた。ただし、これ以外の世帯のほとんどはコメなどを購入することを目的としている。

透明ではあるが、とりあえずてっとり早く、特別な知識も大きな投資も必要なく、当座必要な現金を手に入れる手段として、多くの村人たちが炭焼きを行っている。

この他、住民たちが現金収入を得るために売っているのは、野菜や果物である。ただし、どちらも種類ごとに季節が限られており、年間を通して売ることができるわけではない。したがって収入も限られている。

牛や水牛、豚、ニワトリなどの家畜は以前から飼育が行われてきており、特に大きな変化は認められない。ただし、牛についてはおそらく減少傾向があるのではないだろうか。複数の住民が、ゴム園ができたことにより、放牧する場所がなくなりそのため牛を売り払ってしまったと語った。豚やニワトリは村の中で飼うが、牛はえさとなる草が村の中にはほとんどないため、放牧地を探さなければならない。しかし、かつての休閑地がほとんどゴム園と⁷なってしまった現在、牛を飼うことはより困難になっている。牛は水牛とともに、まとまった資金を得るための重要な財産であるという認識が住民の間には現在もあるが、かつてのようにできるだけ頭数を増やそうという意識はなくなりつつあるようである。

以上、2005年以来、大きく変化した状況の下で、住民たちの経済活動がどのように変化したかをコメ生産の土地のアクセスと現金収入獲得という二つの視点から全体を見渡す形でまとめた。では、個々の世帯を単位とする戦略は具体的にどのようなになっているのだろうか。

2. 生存のための世帯戦略

繰り返しになるが、この村でかつてきわめて均質的であった生活スタイルや生業形態は過去のものとなりつつある。均質性の基盤となっていると言っ

7 牛を飼うことの困難さの原因の一つは、牛がゴム園のゴムノキに被害を与えた場合、牛の所有者に1回につき5万キープの罰金が科せられることである。かつて20頭を超える牛を所有していたある女性は、この罰金が怖くて牛をたくさん飼う気になれないと語った。

でも過言ではなかった焼畑での陸稲栽培を中心とする生業形態がこれまでのような形で継続が不可能となった以上、それぞれの世帯がそれぞれにとって利用可能な資源をもとに生き残りを図るしかない。とはいえ、2005年以前に生業形態について世帯間でまったく差異がなかったのかというところではない。おそらくすでに徐々に差異は拡がりつつあったのではないかと考えられる。というのは、たとえば精米機やトラクターなどを保有する世帯も2005年以前に存在したからである。トラクターの前は牛車であったが、これらはごく一部の世帯しかアクセスできない、一種の財産であった。精米機は筆者が最初にこの村に滞在した98～99年時点で2機存在した。つまりその時点ですでに他の世帯に精米させ現金を稼いでいた世帯があったということである。

また当時トラクターはなく、牛車しかなかったが、隣村の住民はこの牛車で焼畑から村までコメを運ぶよう他の世帯から依頼された場合、その代金として運んだコメの10%を徴収していた。その後、牛車がトラクターにとって代わられたが、トラクターもほぼ同ような機能を果たすといってよい。ただ、コメ以外の物や人間も運搬し、その代金を受け取る。違うのは少なくともこの村では、かつての牛車の所有者たちは自らコメ栽培を中心に行い、牛車を現金収入の獲得のためというよりも、自らの農作業をより楽に便利にするための道具とみなしていたということである。そのため、多くは自分の家族や親族のために使用し、わざわざ他人や他人から依頼された物を運んでその代金を得ることは、少なくとも筆者の滞在中ほとんど目にすることはなかった。他方トラクターの場合は、自生する草を食べる牛とは異なり、燃料を購入する必要があるため、これを動かすことは必然的に現金の支出を伴うことになる。要するに、ただで人や物を運ぶことはできず、ガソリン代と称して代金（あるいはコメ）を徴収することになる。そこからひいては、この代金、つまり現金を得ることを目的としてトラクターを使用する住民たちが、この村でも登場したと考えられる。牛車からトラクターに替えること

は、単純に動物から機械への動力の変更ということではなく、これを使用する際の思考の変化も伴いうるものである。

ゴム植林開発はこのような傾向を今後、強化する原動力になりうるのかもしれない。もちろん、そのような意図のもとでこの開発が行われたわけではないが、それまで大多数の世帯が何の迷いもなく、当然の如く行ってきた焼畑での陸稲栽培を困難にし、これ以外の生業活動をそれぞれの世帯やそのメンバーに模索させることになったことは確実である。そして、それまであまり目立たなかった世帯間が保有する諸資源の差異も徐々に明白になってきたのではないか。たとえば、牛を多数保有している世帯はこれを売却することにより、水田を購入でき、そこで自家消費用のコメの生産を継続できた。また、ある世帯はすでに水田を以前から所有していたが、そこにゴム植林された土地から土壌が雨とともに大量に流入するようになり、稲作ができなくなってしまった。丁度、ゴム会社がゴム加工工場用地とするためにその土地を購入したいという申し入れをこの世帯にしたため、売り払って3千万キープの資金を得て、これで「ホンダイ (Hyundai)」と呼ばれるトラックを中古で買った。この世帯はすでにトラクターを所有しており、これで人やコメなどを運搬して現金収入を得ており、おそらくこのトラックも今後、同様に使用されさらなる現金収入をこの世帯にもたらすものと予想される。

一方で水田を購入するために売却できる多数の牛をもたず、また売却可能な土地ももたない多くの世帯はどうするのだろうか。これに関してひとつの傾向として挙げることができるのは、以前から存在した親族間の相互扶助である。これを強調するある住民の語りの一例を挙げると、彼女は夫がすでにかなり前に糖尿病で亡くなり、その後、彼女の親や姉妹が故郷の村からやってきて連れ戻そうとしたが、これを受け入れず、そのまま子供たちとともに村にとどまる決意をした。まだ成人前の子供たち3人を抱え一家を支えることになった彼女を、亡夫の父母や弟たちが援助した。その後、成人した長女は結婚して独立し、二女は結婚して夫とともに母親と未婚の弟と同居すること

になった。彼女は、夫を亡くした彼女や父親を亡くした子供たちを決して見捨てず、なにくれとなく援助の手を差し伸べてくれた亡夫の実家や弟たちとの現在も続くつながりを強調する。最近では義弟の一人が村の行政的な役職に就き、その研修に参加するため数ヶ月間農作業に従事できず、稲刈りや脱穀が大幅に遅れていたが、自分たちを助けてくれた義弟一家のために自分や子供たちも協力して作業の手助けをしたという。実際に、現在も亡夫の家族からの援助は続いており、この世帯が所有する井戸は義父が出した資金300万キープによって最近掘られたものである。ちなみにこの義父というのは、水田をゴム会社に3,000万キープで売却した人物であり、おそらくこの売却代金の一部がこの家族に流れたものと考えられる。

このような親族間の相互扶助は他の複数の世帯にも認められ、そしてこの関係はある局面では強化されているように見受けられる。特に世帯で消費するコメに関して、親族間で分配をする。かつては、家から独立をするということは、焼畑も独立したものをもち、米倉も独立して建てることを常としていた。つまり、独立して生計を営むということを意味していたのである。ところが、焼畑用の土地を失い、自家消費用のコメの確保がほとんどの世帯にとって困難になると、近い親族同士でコメだけでなく、その欠乏も共有するようになっていく。ある世帯は、70代の母親と40代の娘、そして母親を亡くした20歳すぎの姪の3人で構成されており、男性の働き手がない。高齢の母親は農作業ができず、しかも土地を失ったために陸稲はゴム園の空いた土地でわずかに栽培しているにすぎない。女性3人の小家族とはいえ、年間消費するコメを自分たちだけで生産することは完全に不可能である。そこでこの家から独立しすぐ裏に建てた家に住む長男が、この家族にコメを分け与えている。とはいえ、彼自身も土地をもたず、ゴム園労働の傍ら同じようにゴム園内のわずかな土地でコメを栽培しているため、自分の家族が食べるコメをすべて自給生産することは不可能である。余剰を分配するのではなく、自分たちも足りないにもかかわらず、男性の働き手のいない母親一家にコメを

援助するというのは、欠乏を母親一家と共有することに他ならない。

このような欠乏の共有は他の親族の間にも認められる。水田を所有しているある世帯は、例年なら余剰米を売って現金収入を得ることができる程余裕があるにもかかわらず、2010年秋は日照りのため収穫が激減し、売るところか一家が食べるコメの量に遠く及ばない状態だった。ところがこの家の女あるじは、収穫したわずか6袋のコメを大事に自分たちの家族のためにとっておくのではなく、姉一家と弟一家に2袋ずつ分けたのである。どの世帯も土地を失い、さらに干ばつが追い打ちをかけ、収穫は激減していた。そのような困難な状況で、自らの家族の生き残りのために、わずかな生産物を外部によって侵害されないよう守るのではなく、逆にわずかな生産物を互いに分配することで、欠乏を共有しようとしていると考えられるのである。

親族間の相互扶助は村の外部の親族との間にも顕著に見られる。すでに述べた、妻の父の水田を妻の兄弟とともに耕作することにした世帯は、かつて焼畑が十分にあったころは、これを受け入れようとはしなかった。また、別の住民は親族が多く住むサラワンの村で行われた祭りに出かけ、帰りにコメを2袋もらってきた。そしてやはりこれを村内の親族同士で半袋ずつ分配したのである。彼の世帯は借地でコメを生産しているが、孫も含め6人家族が年間食べる量のせいぜい3分の1程度しか収穫できない。サラワンにあるその村は水田で稲作をやっており、コメが沢山収穫できる。親族はおそらく彼の窮状を聞き、援助したいとコメを贈ったのであろう。もらったわずかなコメも親族間で分配するというのは、おそらくかつてのようにそれぞれの世帯がコメを十分に生産していた頃には考えられなかったことだろう。

では、この村においてこのように親族間のつながりや相互扶助が強化される傾向が全体的に見られるのかというと、必ずしもそうではない。逆に一部には個人主義的傾向がはっきりと認められる。ここでは2つの世帯を例にとることにする。

軍隊勤務のあるじをもつ世帯

軍隊に勤務する30代後半のあるじはセコーン出身だが、まだ若い時期に親類を頼ってこの村へやってきた。この村に住んでいた妻と10数年前に結婚し、妻の母と長く同居していたが2008～2009年に新しく鉄筋コンクリートの家を建て独立した。妻の母は当初、一緒に住もうという誘いに乗らず、しばらくもとの小さな家に住んでいた。あるじは職場で頼母子講に参加しており、8～9年間、月給のほとんどを毎月これにつぎ込み、かなりの資金を貯め、やっと念願の大きな家を建てることができたのである。焼畑もわずかながらやっており、またバナナ畑ももつ。さらに野菜を植えて売る。ほかに牛も6頭飼っており、これはパクソーンに住む弟に預けている。豚はかつて飼っていたが、家を建てるときに売り払った。新しい家に移ってから、妻は軒先で小さな商店をはじめ、菓子類やたばこ、せっけんやシャンプーなどこまごまとした日用品を売っている。ただ、あるじによれば収入はあまり多くはなく、その日によって10万キープ以上の売上があるときもあれば、5～6万キープのこともある。しかも入った現金は循環してすぐに出ていってしまうから利益は見えない。しかし、多くはなくともこれを節約して貯めれば月30万キープとして、1年で300万キープ以上貯まる。急いで貯蓄にまわせばすぐに100万キープぐらいにはなると語る。

日常的な収入源としてはこのほかに、バナナ畑がある。この世帯は2ヘクタール保有しており、自分で収穫して売る以外に、親戚や知り合いに収穫させて1回につき1～2万キープ受け取る。これで日常的に必要な調味料や食料品などを購入する。自分で売りに行くときは1回につき4～5万キープの収入になる。子供は12歳の長男を頭に5人いるが、3歳の4男と生まれたばかりの末っ子以外は皆学校に行っており、働いている者はいない。

さて、彼の妻の母には同じ村にもう一人の娘とおばが住んでおり、おば夫婦には子供がいなかったため、その娘（彼の妻の姉）が結婚後も同居しておば夫婦の面倒を長くみていた。おばの夫は数年前に亡くなり、おばも2010年

に亡くなった。おばと娘（彼の義姉）一家が住んでいた土地も、彼の義母が住んでいる土地もすべておば夫婦のものであった。おばの葬式で彼は50万キープを葬式費用の一部にと供出した。そしてその後、土地をめぐるめめごとが起こったのである。彼は自分が葬式費用を援助したことを理由に、義母が住む家の敷地を自分にくれるよう要求した。しかし、義姉夫婦はおば夫婦の面倒を最後までみたのは自分たちなのだからとこれを拒否し、彼はそれならば葬式費用として自分が出した50万キープを返すよう要求したのである。

その後、この問題がどのように解決したのか、あるいはしなかったのかは現時点では定かではないが、親族間でこのように土地をめぐるめめごとが起こることは少なくとも筆者の知る限り、かつてはなかった。しかも土地を要求する根拠が、葬式費用の一部を供出したことのみであることから、この要求には少々無理があると思われる。親族が葬儀費用の一部を牛1頭、豚1頭、あるいは現金といった形で出すことは、この村でなくともラオスでは一般的なことである。これを理由に土地など財産の相続を要求するといったことはあまり聞くことはない。土地や家屋などの遺産は故人の面倒を最後までみた者が相続するのが当然とされており、すでに独立していた親族は、独立時にいくばくかの土地や牛などの家畜を受け取り、もとのあるじが亡くなった時点でさらに財産を要求することは、少なくともこの村では見たことはなかった。このケースでは、要求している男性が故人とともに生活したことは一度もなく、実質的に面倒を見たこともなかった。したがってこの村の慣行では、この男性が故人から生前であろうと財産を相続する権利があるとは認められない。実際に、男性から相談を受けた元村長（現在は村が統合され、副村長兼村における党代表となっている）は困惑し、その妻にいたっては彼が帰って行ったあと、「50万キープ出したからって、なんで土地なんて要求できるんだ。最後まであのおばさんの面倒を見たのは彼女たち（彼の義姉一家）だったじゃないか。よくそんなことがいえたもんだ」とあきれ返っていた。

この事例は、親族同士の相互扶助を強調する語りや実践が存在する一方で、親族間に土地など財産をめぐる葛藤が一部で生まれつつあることを示すものである。そして、この葛藤は、親族間の関係を金銭的な価値に基づく互酬的な関係ととらえたことに起因すると解釈できるのではないか。そしてそれはこれまではあまり見られなかったことである。

農業を放棄し商売に専念する世帯

村のほとんどの世帯が、ゴム植林プロジェクトによって農地のほとんどを失った後も、細々とコメの生産を継続していると述べたが、例外も存在する。この世帯は、2005年にプロジェクトが開始するとほぼ同時に焼畑での陸稲栽培を放棄した。あるじは、かつて軍隊に入り、ベトナムなどへ行ったのち、除隊して村に帰ってきて結婚し妻の両親とともに暮らし、長く焼畑などをやっていた。彼によれば、焼畑をやめたのはこれを継続しなくとも、なんとか食べていけるだろうという計算があったからだという。当時、彼はすでに精米機を所有しており、これによって収入を得ていた。また牛車からトラクターに替え、これで焼畑から村までコメを運ぶことでも収入を得ていた。さらにバナナ畑を1ヘクタール所有しており、バナナの葉を売ることでも現金を得ていた。彼はいろいろ考えたあげく、焼畑をやめることを決意したのである。実際に、一家がそれで困窮している様子はない。食べるコメが不足することはないという。なぜなら、コメを運びその10%程度を代金として受け取っているからである。トラクターは1度に最低30袋を運ぶことができる。すると3袋を代金としてもらう。1日2往復すれば6袋のコメをもらうことになる。これを何日間も続ければ、家族が食べるコメに不自由することはないというのが彼の説明である。

またバナナの葉も頻繁に売る。週に2～3回からときには4～5回は市場へ行ってバナナの葉を売り、月に最低でも100万キープは得るといふ。特に乾季はバナナの葉が育つのが遅いため、他人の所有するバナナ畑の使用権を

2～3か月間だけ買い、バナナの葉を売る。乾季はバナナの葉が育つのが遅い分、市場における供給量も減少し、そのため値が上がる。1日で10万キープの売上を得ることも珍しくない。そのため、彼は他人のバナナの葉を買ってまで売るのである。生活に必要な食料品や日用品などはすべてバナナの葉を売って購入しているという。

一方、精米機による収入は、1週間に平均20万キープ程度だと語る。精米で出る米ぬかを客が持ち帰らない場合は、精米代金として米ぬかを受け取る。そしてこの米ぬかを売るのである。もともと、彼が2002年に中古の精米機を購入したのも、米ぬかを買いにきた者がいたことがきっかけだった。何度も米ぬかを買いに来る者がいたため、これが売りものになることを知り、精米機を買うことにしたのである。また、トラクターでコメを運ぶ代金として受け取るコメを食べてさらに余剰があれば、これを精米して売ることもある。

バナナの葉、米ぬか、精米以外にもさまざまな果物や野菜を売る。マンガーやタマリンドなど、家の敷地内に植えた野菜や果物は季節は限られるがいくばくかの収入をもたらす。さらには妻の父が生前飼育していたハトも継続して飼育しており、買いに来る人がいれば1羽2万キープで売る。

このようにさまざまなものを売り、また運搬するなどして収入を得ているが、その後、彼はトラクターを700万キープで売りはらい、これにそれまでこつこつ貯めた金をたして中古のトラックを2,000万キープあまりで購入した。彼はこれで本格的に商売をやりたいと考えている。たとえば、セコーンの水田地域で安くコメを買付け、これを村に運んで自宅で精米し、市場で売るといふのだという。またコメに限らず、ほかの作物でもめばしいものがあれば、買ってきて市場で売るつもりだと語る。

彼の口から親族との相互扶助についての語りは一切聞かれない。彼自身の親族は村にはおらず、彼の両親らは一時、この村に住んでいたが、革命後、セコーンへ帰ってしまった。妻はこの村で生まれ育ち、両親はすでに亡く

なったが、兄弟姉妹、いとこたちが大勢いる。しかし、これら親族との関係はあまり密接ではないように見える。かつてこの世帯は、妻の父の兄の世帯と、独立した2つの世帯と共同で毎年ラオ暦4月の満月の日に儀礼を行っていた。これら世帯は水牛供犠を行わず、ピー・カタイと呼ばれる独特の慣習をもっていたからである。4世帯が合同で参加していた豚とニワトリを供える儀礼は、妻の父の兄の家で行っていたが、現在はこの合同の儀礼はなくなっており、それぞれの世帯が個別に儀礼を行っている。その理由を彼に尋ねたところ、妻の父やその兄が亡くなったのち、別々にやるようになったのだという。というのは、たとえばこの4世帯のうちの誰かが慣習に背く行いをしたとすると、そのせいで病気になるのは必ずしも同じ家のメンバーとは限らない。4世帯のうちの誰か他の家の者が病気になるかもしれない。その際、話し合いで決めることが難しいというのが彼の言い分である。彼ははっきりと語らなかったが、おそらく儀礼の費用の分担についての交渉のことだと思われる。償う儀礼をしなければならなくなったとき、慣習に背いた行為をした者に当然、責任があるのだが、病気になっているのは別の人物であり、両者の間で費用をどう分担するか、その交渉がどうやら容易ではないようである。彼によれば、「強く言いすぎても穏やかすぎてもだめなんだ。だから別々に（儀礼を）やることにした。自分が間違いを犯したら、自分の家で（償いの儀礼を）やる。他人が間違いを犯したら、他人が自分の家でやる。間違いを犯さなければそれまでだ。」

父たちの代まで共同で行ってきた儀礼を個別にすることというのが、親族間の紐帯を測るうえでどの程度の重要性をもつのかを評価するのは簡単ではないが、少なくとも筆者がこれら親族たちから聞き取りをした限りでは、たとえば経済的な面や農作業などでこの4世帯が相互扶助を行っている様子はまったく見られなかった。このうちの1つは彼の妻の姉の世帯だが、この世帯はむしろ夫方の両親や兄弟たちとの相互扶助的関係が強くみられる。一例をあげるなら、夫の父の援助により彼らは井戸を掘ることができたのであ

る。もう一つの世帯は、妻の父の兄の長女、つまり彼女にとってはいとこにあたる女性の世帯だが、この女性の夫は数年前に目を患い、ほとんど目が見えない状態になっている。そのため働くことはできず、またほかの男性の働き手もないため、かなり困窮を極めた様子だが、彼らに対してこれらの世帯が援助をしている様子は全くないし、この男性の一家に聞き取りをしたときも、そういう内容の話は一切聞かれなかった。そして、もう一つの世帯、すなわちかつて儀礼を共同で行っていた家であるが、この世帯は、別の郡に住む妻の父が所有する水田を妻の兄弟と共同で耕すことにしたといい、妻方の親族とのつながりをむしろ強化していることがわかる。

したがって、この世帯とその親族との関係からいえることは、親族間の紐帯や相互扶助の関係が弱まっているということではなく、この世帯がむしろ個人主義的傾向を強めているということだろう。夫のほうはたまたま自分の親族が同じ村に住んでいないため、自分の親族に頼ることが困難で、妻は親族は少なくないが、彼らとの密接なつながりは見られない。あるいは親族とのつながりを重要な資源とみなすのではなく、むしろ自分たち自身の努力により、困難を切り抜け生き残りを図ろうという戦略だともいえるだろう。

先にとりあげた軍隊に勤務する人物についてもおそらく同様の考え方を認めることができるのではないか。彼も自分にとって近い親族は村にはおらず、妻方の親族とは必ずしも密接な関係を結んでいるわけではない。このような関係が、妻の親族に対して土地の要求を彼にさせたと見ることも可能ではないだろうか。彼にしても、妻方の親族のつながりを重要な資源とはみなしていないと思われる。なぜなら、彼が現在の家を建てた資金は、軍隊の仲間との頼母子講が元手になっているからである。いわば、親族の外、村の外部にある彼自身の固有のネットワーク、あるいは資源によるものである。このような親族外、村の外部の資源やネットワークに頼ることのできる人々にとって、親族とのつながりの重要性は相対的に低下し、親族に対し個人主義、あるいは利己的とも受け取られかねない行動をとりうることになる。

また、もう一方の商売へと転換している人物についていえば、このような外部のネットワークをもたない彼は、親族よりは自分自身の努力にひたすら頼っているといえるのかもしれない。彼は毎日のようにバナナの葉を採り、市場に売りに行くのがいかに疲れるかを語った。特に祭りの時期はバナナの葉がよく売れるため、何日間も続けて売りに行く。ときには朝10時に市場から戻ってきたら、11時には畑へ翌日売るバナナの葉を採りに行くこともある。食事をする暇さえないときもある。それでも、「何もしないでぶらぶらしていたら、1キープだって入らない」と言い、彼が精力的にさまざまな仕事をし、収入を得ようとする姿が認められる。そしてそこには、親族などに頼ることをしない代わりに、親族を助けることにもあまり興味を示さない、いわば個人主義的態度が見てとれる。親族共同の儀礼を取りやめ、各世帯が個別の儀礼を行うという変化は、まさに彼の個人主義的傾向の表れだといえるのではないだろうか。

この二人の男性は、筆者が最初にこの村で住み込み調査をしたときはまだ20代の若者であった。二人ともすでに結婚し子供もいたが、一方はわずかな給料で軍隊に勤務し、妻の母の小さな家に住んでいた。もう一方は他の住民たちと同じく、焼畑で主食のコメを栽培する、何ら変わったところのない若者だった。しかし10数年を経て、二人の暮らしぶりも行動も以前とは大きく違っている。大多数の住民たちが、かつての焼畑がゴム園に姿を変えてしまった現在も主食のコメをたった数カ月分であっても生産しようと、土地を懸命に探している一方で、二人の関心は別のところに向けられている。このような違いについて、以下考察を試みる。

3. ディスポジション（傾向）の持続と変化

先に述べたように、大多数の村人たちの経済的な実践や思考パターンは10数年前から根本的にはあまり変化が見られない。主食であるコメをどのよう

に確保するのが最大の関心事であり、そのために別の村に住む親族の水田耕作を手伝ったり、土地所有者から開墾を条件に1年だけ土地の使用を許してもらったり、そうでない場合はゴム園の隅の傾斜の急なわずかな土地に陸稲を栽培するという選択を行う。コメの確保以外の経済活動はごく二次的な位置づけが与えられているにすぎない。すでに述べたように、バナナの葉を売るのは、パーデークやペーンヌア、あるいは石鹸や洗剤などの必需品が切れたときであり、これは10数年前とほとんど変わらない。つまり、彼らは必要なものを手に入れるためにバナナの葉を売るのであり、逆にいえば、必要がなければ売りには行かないということである。純粹に現金獲得と蓄積を目的とした販売活動とは異なる。市場で売る以上、当然、現金が媒介してはいるが、限りなく物々交換に近い行為だといえるのではないかな。

住民たちが売るもので、バナナの葉よりもまとまった現金の獲得手段になっているのが家畜である。特に牛や水牛、豚は彼らにとって重要な財産であり、それは10数年前から変わっていない。これら家畜は短期間で売却することができないが、何かのときにまとまった額の現金を都合するほとんど唯一といってもよい手段となっている。家の建築や改修、井戸の掘削、さらにはバイクやテレビなど高価な耐久消費財の購入のために多くは牛を売却するが、とはいえ、あらかじめ具体的にこれらの購入を目的として最低でも2～3年という年月をかけて飼養するのかというと、必ずしもそうではないようである。というのも、たとえば家族が病気になり、病院での治療の必要が生じるというように、緊急時に必要に迫られ別の目的で売却する場合も少なくないからである。むしろ、牛や水牛などの家畜は、いわゆる蓄積可能な財産と考えられているのである。しかも、売却によって家の改築や高価な耐久消費財なども手に入れることのできる重要な財産なのである。この点で、日々交換されるバナナの葉とは大きく異なっている。

物々交換に限りなく近いバナナの葉の販売と、財産としての家畜という位置づけには、いわゆる貨幣経済の定着以前の貨幣のあり方が反映されている

のではない。K. ポランニーは、交換手段として使用される貨幣が、支払い、標準、富の貯蔵などそのほかすべての機能を果たす力を持っている現代社会に対し、古代社会は「多目的」貨幣を知らず、いろいろな貨幣機能に対して、それぞれ異なる貨幣材が使われ、たとえば富を伴う威信や額の大きいものの評価には奴隷や馬や家畜が標準として使われ、子安貝の貝殻はもっぱら小額の場合の尺度としてのみ使われたと述べている [ポランニー 1975:63]。古代社会ではなく現代社会でも、P. ボハナンはナイジェリアのティヴ社会において、互いに交換される商品や品目に3つのカテゴリーがあり、第一のカテゴリーは食料品であり、第二のカテゴリーに含まれるのは奴隷、家畜、*tugudu* という白い大きな布、そして金属棒で、第三のカテゴリーは奴隷以外の人間、特に女性に対する権利であり、これらカテゴリー同士は互いに排他的であると記している [Bohannon 1955:62]。

このような見方を当該社会に当てはめるならば、大多数の住民にとってバナナの葉によって得られる現金＝貨幣は富の貯蔵という機能は持っておらず、牛や水牛などの家畜がこれをもつことになる。しかもこれら家畜はそれだけではなく、支払いの機能も果たす。たとえば、婚資としていまだに牛が現金とともにこの地域で使用されることは珍しくないし、また慣習に背いた行為に対する補償は主に牛で行われる [中田 2004]。支払いについていえば、コメがこの機能を果たすことは、トラクターで収穫したコメを運搬する代金が運んだコメの10%という量で支払われることによって示されている。現金はもちろん交換手段であり、支払いの機能も、当然、標準の機能も果たしていることは確かだが、富の貯蔵という機能についていえば、現在のところ、あまりあてはまらないのではないだろうか。というのも、定期的な現金収入がなく、現金の獲得手段に限られている人々には、たとえば10キロ以上離れた町にしかない銀行で銀行口座を開くなどという発想自体が存在しない。いわゆる「筆筒預金」という方法もあり、一部の住民は少しずつ現金を貯めてトラックやバイクを買ったと述べているが、実際にはそのままでは増

えない筆筭預金より、むしろ育てていけば大きく価値を増やす牛や水牛など家畜の形で財産を蓄積しようとするほうがより有利だと考えることは理にかなっている。その意味では、貨幣はこの地域の住民にとって、相対的に限定的機能しか果たしていないといえるのではないだろうか。

賃金労働に関しても、彼らのこのような経済実践や思考パターン、さらには貨幣の使用法が反映されていると考えられる。多くの村人がゴム植林プロジェクトにより、土地を失った後、賃金労働で足りないコメを購入しようとしていることはすでに述べた。それ以前、村人たちが賃金労働に全く従事していなかったかといえば、そうではない。98～99年当時も、製材所で賃金労働を行っていた住民はごくわずかではあったが存在した。また、近くの農園で除草作業の日雇い労働にたまに就く村人は少なくなかった。とはいえ、どれも単発の仕事で、定期的な雇用ではなく、さらに農閑期に限られ自分の焼畑での作業に対し優先されることはけっしてなかった。

賃金労働が重要性をもつようになったのは、まさにゴム植林プロジェクト開始以降である。それも、最初の2年間ほどはゴム園内で各世帯は陸稻栽培を継続し、その後はこれに代わって世帯あたり2ヘクタール程度のゴム園の区画が割り当てられ、その除草や施肥などの作業に対し報酬が支払われた。ところがこれもいよいよ廃止となり、ゴム会社は労働者を雇用し、ゴム園での作業をすべて彼らにやらせるようになった。住民たちの多くは労働者として雇用され、いよいよ本格的に賃金労働に従事するようになったのである。

ところが、こうして雇われたカマコーン・ナイと呼ばれる正規雇用の労働者たちのうち、大勢が数カ月あるいは1年経つか経たないかのうちに辞めてしまっている。その理由はさまざまであるが、特に焼畑での稲刈りの時期に、家族の仕事を優先させてゴム園の仕事を数週間、1か月単位で休んでしまった後、ゴム園の仕事に戻ることを許されなかったというケースが複数認められる。このような経緯で辞めた男性たちは、特に労働力が十分でない小家族の場合、家族が稲刈りで忙しくしているのに、これを手伝わないわけに

はいかないと答えた。つまり、やはり彼らにとって食べるコメを確保すること、そのための労働が最も優先すべきものととらえられているのである。これに比べれば、現金収入を獲得するためのゴム園での労働は優先順位では劣ることになる。おそらく、会社側は、自分たちが支払う給与をコメの購入費用に充てれば済むことだと主張するだろうし、客観的に見てそれは可能である。しかしながら、たとえばコメ生産のための労働と、コメ購入に充当できる給料＝現金を稼ぐための労働を住民たちが同等と見なしているかどうかは別である。いわゆる一般的な経済合理性のもとでは、1年間のゴム園での労働により得られる給料でコメが何袋購入することができるかを計算し、それで家族の生計が維持できるかどうかを判断したうえで選択すべきだとなるのだろうが、彼らの経済実践や思考パターン、というよりはこれを生み出しているディスポジションは、どんな種類の労働も貨幣価値に置き換え計算するという発想とは無縁であり、明らかにコメ生産の労働を重視しているのである。

もうひとつ、賃金労働に関して特徴的なのは、給与の支払いに関する住民たちのとらえ方である。住民たちがゴム会社に対して語った不満のなかに、給与の支払いが遅れるという内容が多くあった。しかし、すべての労働者から同じ不満の声が聞かれたわけではない。一部の労働者には遅れなく給料が支払われ、それ以外の労働者には遅れるなどということが起こるはずがないと思い、実際に話をよく聞いてみると、どうやら給料が1カ月分まとめて翌月に支払われることを、運配ととらえているふしがあることがわかった。さらに、ある月の労働日が少なかった労働者は、翌月分とまとめて2カ月分がそのさらに翌月支払われることがあり、これを遅れととらえているらしいのである。「ご飯は毎日食べるのに、給料が遅れたら、一体どうすればいいんだ」という内容の不満を複数の住民がもらしたが、これは賃労働について、彼らがこれまで基本的に単発の労働にしか携わってこなかったことと関係しているのではないだろうか。日雇い、あるいはせいぜい4～5日という短期

間の除草作業に就いたことがあるだけの人々は、1か月も給料をもらえず待たされるということには慣れていない。日雇いや短期間の労働に就き、その日稼いだ現金で食料品や調味料などを購入してきた人々にとって、これは本当に給料がもらえるのかという不安にすら結びつきかねない。というよりは、賃金労働は彼らにとって、まさにすぐに使える現金を手に入れる手段としてみなされてきたのであり、そうでなければあまり意味がないのである。

客観的に見れば、コメ作りは開墾から収穫までに数カ月間を要する長期的な活動であり、短期間で収穫を得ることはできない。しかし、この活動に先祖代々、長年にわたって就いてきた彼らにとってこれはあたりまえである。他方で、賃金労働は彼らにとってまだ新しい活動であると同時に、給料を払ってくれるのは、会社という彼らのコントロールの範囲を完全に超えた馴染みのない存在である。その会社を本当に信用してよいのか、といった不安がつきまってしまうのではないだろうか。その日の必要を満たすための食料品を購入することができず、待たされることに不満を抱き、それならいっそのこと自分たちで思いのままできる焼畑に専念してしまおうとしても必ずしも不思議ではない。

上記のように、多くの住民たちに従来の伝統的な経済的ディスポジションが根強く残っていることが明らかである一方で、先に述べたように一部の住民はかなり異なる傾向を見せている。すでに挙げた二人の男性は、口ではバナナの葉を売って生活を賄っていると言いつつも、うち一人はその頻度の高さから、実際にはそれ以上の収入を得ていることがわかる。彼は、「毎日行くわけじゃないが、祭りの日は続けていく。他の仕事を何もしていないときは毎日行く。（1日の儲けを尋ねると）この時期（雨季）は駄目だ。最高で8万キープだ。多くない。乾季はいい。10万キープ単位になる。雨季はバナナの葉が早く育つから不足することはない。乾季にもこれくらいたくさん採れたら10万キープ、20万キープになることもある」と語った。しかも、彼はより有利な取引のための駆け引きも行っている。バナナの葉は2枚を重ね折

りたんで束にしたものをしばり、これを1束500キープで、この束をいっぱい詰めた袋1袋は1万～2万キープで売るが、彼はその朝は1万8千キープで売ったと語った。そのさいの、買い手との駆け引きについて、次のように語っている。「ばら売りだと2万キープだけど、値下げして2千キープ安く売ったよ。早く戻ってきたかったからね。買い手はたくさんいた。こうやって値下げすれば相手も2千キープ得をする。相手だって1キープも得をしなかったら買わないよ。おれたちはこうやって売ることができるんだ。あんたもおれたちも得をするんだ。人によっては、たとえば2万キープで売りたいとすると、最初から2万キープといってしまう。それじゃ相手も2万キープで買わないよ。ふつうは、2万キープで売リたかったら、最初2万2千キープっていうんだ。最初から2万キープっていったら、相手は2万キープで買うもんか。」このような駆け引きからわかるのは、これが調味料などを買うことを目的とした活動などではなく、より多くの現金獲得や蓄財を目的としたものだということである。もう一方の男性についても、いわゆる必需品購入を目的とした販売とは異なるといえる。とりわけ、両者ともに、現金収入の獲得手段はこれだけではないことを考慮に入れると、同じバナナの葉を販売することに対する、他の村人との位置づけの違いが浮き彫りになる。

この二人に共通しているのは、ほかの住民たちより積極的に金を稼ごうとする姿勢である。それぞれがアクセス可能な資源が異なるため、二人の行動自体は異なっている。しかし両者とも、日々入ってくる現金を少しずつ貯め、これを元手に金をさらに増やそうという意識は明確にもっている。軍隊勤務の彼が妻が営む小さな商店のそれほど多いとはいえない利益を、1カ月、1年単位で計算し予測すること自体、ほかの人々にはあまり見られない。一方、商売を本格的に行おうとする彼についても、頻繁に売るバナナの葉や精米や、コメの運搬から入る金を少しずつ貯めてトラックを購入する資金を作るというのもあまりほかの人々には見られない。また彼にバナナを市

場へ売りに行くのに、買ったばかりのトラックを使うのかと聞くと、乗合のトゥクトゥクで行ったほうが安いからトラックは使わないと答え、ただし、仲間が10人程度一緒に行くのであれば、1人につき往復1万キープを運賃として徴収するから、その場合はトラックを出すと付け加えた。彼は常にこのような計算を行い、その都度選択を行っているのではないだろうか。

経済的ディスポジションについてブルデューは、これが時間の観念と深く関わると分析している。すなわち、前資本主義経済にとって、探求やコントロールの計算に帰属する可能性の場としての未来という表象ほど異質なものはないとし、消費財のように即席の満足を提供し確実な安全の保証となることのできる直接的な財と、それ自体は何の満足の源にもならず、直接的な財の生産を目指すか、計算によって構築される「未来」に対してのみ意味をもつ間接的な財とを区別している。前資本主義経済では経済行動は経験のなかで直接的に把握された、または伝統を形成するあらゆる経験の蓄積によって確立された「来たるべきもの *à venir*」に向かうとしている [Bourdieu 1977:19-20]。つまり、多くの住民たちが現金そのものを蓄積する代わりに、牛などの家畜で財産を形成しようとするのは、これが即席の満足を提供し、確実に安全な財として認められるからであり、間接的な財である現金はそうではないからだということになる。さらに、ここで挙げた二人が毎日入ってくるバナナの葉や精米による現金を少しずつ貯め、あるいは頼母子講で何年もの間、貯めるのは、計算によって構築される「未来」という観念をもっているからだといえるだろう。

このような「未来」に対する観念が、おそらくこの二人のなかに投資という観念を他の住民たちより明確に形成させているのではないか。軍隊勤務の彼は「金を循環させる」という表現を使ったが、これはまさに投資の観念に近いものではないか。さらに商売をしている彼のほうは、精米機やトラックの購入という形でより明確に投資を行っている。トラクターを売り払い、トラックを購入したことについても、コメを買い付け精米して売る、コメ以外

のものも買い付けてきて売るという計画があらかじめ描かれている。彼らにとってけっして小さな金額ではないトラックの購入代金を少しずつ貯めた金で工面したことも、伝統を形成する経験の蓄積による「見通し *prévoyance*」によるものとは異なる「未来」を構築しようとする意志の表れだと考えられる。

焼畑をやめる決心をしたときも彼なりの計算に基づいていた。コメは（焼畑で）作るほうがいいのか、買うほうがいいのか尋ねると彼は、買うほうがいいに決まっていると答えた。1日、トラクターで運搬すれば袋単位で手に入るからである。一方、焼畑でコメ作りをすれば、1年で40～50袋手に入るけれど、これは時間がかかりすぎるというのである。しかも焼畑をやっていれば、他の仕事がしづらくなる。つまり、他の大多数の住民たちが数カ月待つて手に入れるコメを、彼はより簡単に、短期間で手に入れられるというのが彼の主張である。だから、自分は焼畑をやめたのだという。ただ、自分のように計算をする人々は他にもいるが、実行することができないというのが彼の主張である。

では、他の住民たちの実践に全く変化が見られないかというと、必ずしもそうではない。たとえば、彼らが口をそろえて言うのは、バナナの葉の販売による収入が日によってかなり違うということである。いわゆる需要と供給のバランスにより、売値が大きく異なる。大きなセメント袋一杯が、最高3万キープで売れることもあれば、たったの2千キープ、あるいはまったく売れず持ち帰ったり捨ててきたりすることもある。そのため、多くの人々はバナナの葉が売れるワン・シンと呼ばれる仏教日や祭りの日、2月の中国正月などの時期に集中的に売りに行く傾向が徐々に生まれている。かつては、すでに述べたように、単純に現金が必要になった時期に売りに行っていたが、少なくとも2011年は不作だったコメを買うために多くの世帯が恒常的に現金を必要としていることもあり、目的は以前と同じく、日常的な必需品の購入であるとはいえ、市場における価格や売れ行きの予想が住民の販売活動

に影響を与えるようになっている。この市場価格や供給の見通しという要素が入ってきた背景にあるものの一つは、おそらく供給の増加ではないかと考える。というのは、住民たちによれば、ほかの村からもときには大勢がバナナの葉を売りにくるからである。「バナナの葉を売りに行くのはこの村だけじゃない、よそからも大勢来る。そんなときは値が下がる」というある住民の語りは彼らが供給の増加とこれによる影響を認識していることを示している。このようなバナナの葉の供給の変化が彼らの販売活動の実践や市場に対する見方を今後さらに変化させていく可能性はあるだろう。

また、ごく一部ではあるが、日常的に入ってくる小額の現金を少しずつ貯めて、耐久消費財の購入に充てるという語りも聞かれるようになっている。つまり貨幣に対する意識も徐々にではあるが、変化しつつあるのではないかとと思われる。住民たちが互いの日常的な実践を目にし、ここで挙げた伝統とは異なる行動をとりながら、生計を首尾よくたてている家族などからも影響を受けている可能性がある。ディスポジションの変化は、あるコミュニティのすべての住民に同時に、一様に起こるわけではなく、それぞれの諸条件や環境などにより差異が生じるものであろう。

今後、ゴム園でタッピングの労働に携わる住民が大きく増加し、彼らの世帯がこれに深くコミットするようになった場合、さらに彼らの経済的なディスポジションに変化が起こる可能性がある。とはいえ、行政当局やゴム会社が期待しているような、農民から労働者への直線的で急速な移行が起こるとは考えにくい。これまで筆者が集めたデータはこのような移行をむしろ否定しており、彼らの労働・生活環境、社会状況、そして慣習や伝統、つまりは文化など様々な要因を考慮に入れつつ、今後注意深く見守り続ける必要があるだろう。

付記

本研究は、独立行政法人日本学術振興会平成21年度～23年度科学研究費補

助金（基盤研究 C）の交付を受けて行った調査に基づく。調査開始時より調査助手をしてくれたラオス国立大学社会学部講師 ヴィエンマラー氏と、調査村の住民の方々の協力に対し、この場を借りて深くお礼申し上げたい。また、インタビュー録音のテープ起こしをしてくれたラオス国立大学社会学部の学生の方々にもお礼申し上げたい。

引用文献

- 中田友子 2004 『南ラオス村落社会の民族誌—民族混住状況下の「連帯」と闘争』
明石書店
2009 「南ラオスの開発と地域住民の文化変化に関する予備的考察」『神戸
外大論叢』第60巻第4号
2010 「南ラオスの農村開発と地域住民の文化変化」『神戸外大論叢』第61
巻第3号
- ポランニー, カール 1975 『経済の文明史』玉野井芳郎, 平野健一郎（編訳）, 日本
経済新聞社
- Bohannon, Paul 1955 Some Principles of Exchange and Investment among
the Tiv. *American Anthropologist*, Vol.57:60-70.
- Bourdieu, Pierre 1977 *Algérie 60: structures économiques et structures temporelles*.
Paris: Les éditions de minuit.